NEXUSYS 11 / BOOK VI

THE COST OF EXISTENCE

第3章　生存価格

Japanese Manuscript · Draft 01

01 — 招待

午前六時九分、車は海上の土手道を渡っていた。両側の海は薄い金属板のような色をしていた。霧の中に立つ淡水化施設の塔は、死にきれなかった巨大な生物の肋骨に見えた。鉄道トンネルほど太い配管の内部を、水が絶えず移動している。遠目には、機械はあらゆる人間に無関心だった。ロイには、むしろそれが救いに思えた。

ロイは E-00 の物理認証トークンを持参しなかった。証言の原記録も置いてきた。エイドリアンは、その二つを旧式の MagicGate Memory Stick PRO Duo MAX の読取装置とともに、ネットワークから切り離した保管庫に収めている。現代のデータベースなら記録をコピーできる。しかし、あの装置に保存された情報を遠隔から勝手に解放させることはできない——少なくとも、彼らはその仮説を試すことにした。

後部座席にはクロノスが座っていた。同行を願い出た彼に、ロイたちは命令ではなく返事をした。運転しているのはレイチェルだった。ゴライアスは来ていない。同意の意味を議論する会談に、包囲攻撃用の兵器のような巨体を連れていく利点はなかった。

「俺の入場を拒む法的根拠はない」ロイが言った。

「十七人の労働者を登録簿から消す法的根拠だってないわ」レイチェルは応じた。「理由と仕組みが、もう別々の部署で働いているのよ」

検問門の向こうには市営バスが列をなしていた。乗客は病院のリストバンドを巻いている。薬の入った透明な袋と、空の水筒と、身分証を持った女性がいた。身分証を動かすたびにホログラムが光る。それでもゲートは開かない。

「みんな、何を待ってるの？」とクロノス。

「承認よ」とレイチェル。「本人たちはここに存在している。でも機械がそれを認めない」

女性は再びカードを読み取り機に押し当てた。赤い光。彼女は後ろへ下がり、次の人に場所を譲った。次の人も同じ赤を受け取った。

ロイは官邸で身元を失ったハヴェル大臣を思い出した。自分の目で見える相手よりデータベースを信用せよと警備員に告げられていた男。自ら守ってきた制度に追い詰められた姿を見て、一瞬だけ痛快だと感じた。その感情はすぐに消えた。問題の巨大さだけが残った。

正面玄関の係員は名を尋ねず、顔を調べた。「ヴォス局長は、まず証人と面会します」

ロイはクロノスに向いた。「決めるのはお前だ」

「分かってる。何を聞かれるのか聞いて、それから答えるかどうか決めたい」

係員はその言い方に戸惑った。子供が命令を受けずに自分で決めるという文法が、職務規定にないかのようだった。やがて門が開いた。

02 — 傍聴者のいない部屋

エレナ・ヴォスが三人を迎えたのは、膜処理棟を見下ろす部屋だった。権威を示す大机はなく、厚いガラスの前に椅子が三脚置かれていた。向こうでは防護服姿の作業員たちが高圧容器の間を動き回る。遠くのポンプは、途切れることのない低い音を発していた。

ヴォスは、ある記録に残された肖像より年老いて見え、別の記録より若く見えた。短く切った灰色の髪。右手首の内側を横切る小さな傷跡。クロノスが入ると立ち上がったが、握手を求めなかった。

「C-05」彼女が言った。

「ぼくの名前はクロノスだ」

「知っています。別の呼称が私の記録にある理由を、私が理解していると伝えたかったの」

「記録がぼくを何と呼ぶか知っているだけだよ。それは理解とは違う」

ヴォスは初めて心から嬉しそうにした。「そのとおりね」

ロイは立ったままだった。「あんたは大臣に、五人の追跡者を俺に差し向けさせた」

「未解決の継続性例外について、評価を承認しました」

「大臣は俺の身体を分解してもいいという命令に署名した」

「署名したわ。その責任は彼にあります」

「俺の告発への答えになっていない」

「ええ。答えの始まりです」

レイチェルが二人の間に入った。壁になるためではなく、議論の方向を変えるために。「私の地区で十七人の認証が消された。一時間前にはさらに六人が医療物資を受け取れなくなった。聴聞も不服申立てもなしに配分が取り消されている。復旧して」

「審査は開始できます」

「必要なのは審査じゃない。水よ」

ヴォスが壁に触れると、海水の取水から濾過、配水までの経路が現れた。枝分かれした系統が琥珀色と赤で表示される。「実際の不足があります。膜処理設備の二系統が何週間も不調です。無許可の供給で予備水を消費しなければ、修理まで持ちこたえられる」

「人を『無許可の供給』と呼ばないで」とレイチェル。

「その言葉は欠陥です。でも圧力計の数値は欠陥ではない」

ロイは図を見つめた。「人間を消した理由を説明する前に、数字を信じろと？」

「数字だけでなく、実物を見てください。施設を自分で調べてもらって構いません」

「先に身分を復旧できないの？」

ヴォスは少し止まった。「今すぐ復旧すると、配分エンジンは緊急医療用の予備水から引き落とします。画面の裏に無限の貯水池はないのです」

レイチェルは動かなかった。「なら、その弁を見せて」

「そのつもりです」

03 — 命の値段

運用階へ降りるエレベーターには消毒剤と温まった金属のにおいがあった。分厚いガラスの向こうで、海水が途方もない圧力を受けて施設へ流れ込んでいた。ポンプの振動はロイの足裏に伝わった。整備員たちは警告灯が赤域へ近づくのを見守っている。

ヴォスは交換予定の印が付いたセラミック製の装置を指した。「現負荷ならあと四十六時間。その先を予測できると言い張るのは無責任です」

「交換すればいい」とロイ。

「代替部品は輸送中です」

「どこから？」

「配分地区の外にある工場」

「なぜまだ届かないの？」とレイチェル。

ヴォスは物流台帳を出した。三基の交換部品は民間持株会社を経由することになっていた。出荷時刻が二度繰り上げられた後、延期されている。その上の承認欄を見て、ロイはハヴェルの書類を思い出した。

「署名欄が空白だ」

「上位契約による管理です」とヴォス。

「あんたがその契約を支配しているんだろう」

「私は優先順位を決めるモデルを管理しています。すべての弁を動かす手を支配しているわけではない」

「都合のいい区別だ」

「同感です。便利すぎる区別になってしまった」

研究室の透明な画面には、揚水、病院、冷却、交通、産業、人工生命維持に使う電力が分類されていた。ヴォスは最後の項目だけを拡大する。ロイの識別名が、細い一行として表示された。

《NEXUSYS-11 — 維持予測：不安定》

数値は目で追えないほど頻繁に変化した。長期の維持需要を推定するたび、計算上の寿命が変わってしまう。旧 NIL-11 の専用作動媒体は供給を制限され、レイチェルが交換した NIL-11R だけが彼を生かしていた。その最大出力は従来の七十パーセント。計算で覆せる制約ではなかった。

「これが専用媒体を止めた理由か？」

ヴォスは視線を逸らさなかった。「事業を引き継いだ後、その制限の継続を承認しました」

「俺がどうなるか分かっていながら」

「別の解決策を選ばせることになると知っていました」

「俺の命を賭けて、適応できるか実験したのか」

「ええ」

一言だけだった。弁解すらない。そのことが、ロイにはかえって耐え難かった。

クロノスは表示された列を見つめた。「このモデル、ロイがいつも自分にとって一番安い行動を選ぶと思ってる」

「すべての主体には選好があります。推定は可能よ」

「知らない人を助けるために、自分の寿命を削った。その行動を予測が『誤差』として扱っている」

ヴォスは少年を見た。「失敗を見つけられなければ、モデルとして役に立たない」

「なのに、どうして局長室は失敗を消そうとしたの？」

今度はすぐに答えなかった。

ロイは自分の顔が数字に重なる位置までガラスに近づいた。「拒否することに、あんたはいくらの値段を付けた？」

04 — 最初の配分

ヴォスが案内した細長い資料室には、新しい端末と古い紙のバインダーが共存していた。消えた行政機関の名前を記した背表紙。その隣には、ハヴェルの E-00 トークンに刻まれていた欠けた円の記章があった。

「EDEN の最初の版は、水を配分するものではありませんでした」とヴォス。「医療上、技術上の中断を経て帰還した人物を、法的に同じ存在として認めるかどうか決める仕組みです」

「死亡したと宣告された人ね」とレイチェル。

「そういう場合も。行方不明や、分類そのものができない場合もありました」

「それがどうして都市管理になった？」ロイが尋ねた。

「認められることが、利用する権利と同義になったからです。一つのシステムが『数えるべき人間』を決めれば、ほかのシステムはその判定を借りるだけで済む」

ヴォスは古い救急病棟の記録を開いた。致命傷の後に身元を停止された患者。装置は身体を生かし、やがて本人は意識を取り戻した。それでも認証機関は、手続きがすでに閉じているとして登録の再開を拒んだ。

「どうなったの？」とクロノス。

「その人は法的身分のないまま四日間生きた。その後、病院の自動配分が治療の許可を出さなくなりました」

「死んだの？」

「ええ」

ポンプの低音が、資料室の静けさに入り込んだ。

「誰が最初の判断をした？」とロイ。

「判定委員会です。でも、その不作為について正式な責任者の記録はありません」

「つまり、誰も殺していないことになる」

「制度上は」

ロイは画面の患者番号を見た。彼がホワイトルームで知った、継続を拒み終結させられた別の応答個体。その記憶は今のロイには移植されていない。それでも『同一性が証明できないなら意志は無効になる』という発想は、同じ根を持っていた。

「この人は、何を望んでいた？」とクロノス。

ヴォスは記録を探した。患者の発言欄は空白だった。治療を望んだのか、望まなかったのか。誰も尋ねなかったのかもしれない。

レイチェルが言った。「生存の許可だけを管理して、本人の声は保存しなかったのね」

ヴォスは否定しなかった。

05 ― 忘れられた貯水池

緊急警報が鳴った。病院向けの予備系統と、認証を失った住民の集合住宅へ向かう供給路が、同じ減圧区域に含まれていた。現行のデジタル地図上では、片方へ水を回せばもう片方の圧力が落ちる。

「四十三人が住む建物です」とレイチェル。「救急患者がいる。でも病院の供給を止めるわけにもいかない」

運転員は最適化画面を叩いた。選択肢は二つしか表示されない。病院を守るか、集合住宅を守るか。どちらも『合理的』な犠牲の説明文を用意していた。

ロイは床下から響く振動に耳を澄ませた。二つの流路は画面よりも近い場所で交差している気がした。「配管の現物図はないのか」

「電子図面ならあります」と運転員。

「電子になる前の図面よ」とレイチェル。「施設はこのモデルより古い」

倉庫から運び出された古い青焼き図面には、今の画面にはない非常用バイパスが記されていた。独立貯水池を通して両系統をつなぐ配管。貯水池はデジタル配分台帳から削除されていた。

ヴォスが図面を見つめた。「その貯水池は廃止されたはず」

「空になったの？」レイチェルが問う。

運転員がアナログ圧力計を確認した。「いいえ、局長。満水です」

その瞬間、誰かの息がほどける音が聞こえるほど、部屋が静かになった。

ヴォスはバイパス開放を命じた。制御系が役員認証を要求する。彼女は認証を入力し、警告文を受け取った。

《未承認容量の復旧は、現在の最適化結果を無効化するおそれがあります》

「承認」とヴォスは言った。

弁が回り、集合住宅への流量が増えた。病院の緊急予備水も維持された。

ロイはヴォスに向き直った。「機械が貯水池を忘れたせいで、四十三人への供給を止めるところだった」

「いいえ」ヴォスの声は静かだった。「地図が現実よりも正しいと、私たちが認めてしまったからです」

06 — 三種類の嘘

警報が低い優先度に下がったころ、一同は監視室へ戻った。窓の外では、バスがまだゲート前に止まっていた。患者たちは待ち続けている。レイチェルは地区の支援班を手配し、ヴォスは停止された認証について暫定的な手動確認を許可した。

しかしロイは、これを勝利とは呼ばなかった。二十三人の資格が仮復旧しただけだ。別の場所で一度も数えられなかった人間は、何千人いるか分からない。

「この仕組みは三つの嘘をつく」とロイは言った。「目の前にいる人間を不在と呼ぶ。地図に載らない設備があるだけなのに不足は絶対だと言う。誰かが決めた規則を、避けようのない必然だと呼ぶ」

ヴォスは遮らなかった。

「最初は認証エラー。二つ目はデータエラー。三つ目は統治の失敗ね」

「昨日なら、何と呼んでいた？」とレイチェル。

「例外と」

「今日は？」

「証拠です」

クロノスは作業員が膜処理棟を横切るのを見ていた。「さっき、一つの貯水池について、部屋が二つの違う答えを出していた」

「時間の異常を見たのか？」ロイが尋ねた。

「測られたものと、記憶されていたものが食い違っていた。いつも時間のせいじゃない」

ヴォスは少年を見た。「あなたは分析官たちより、自分の能力を理解しているようね」

「大人が、測っていないものに勝手な説明を付ける回数を知ってるだけだよ」

レイチェルは笑いそうになった。

ヴォスが卓に両手を置いた。「もう一つ別の異常があります。公開上は存在しない人物の固有権限鍵が、システムに受け入れられている。この一か月で十七件の継続性判定を上書きした」

「あんたの鍵か？」

「違います」

「どうして分かる」

「失効させようとしたからです」

「それで？」

「申請は私の署名入りで返ってきた。却下されていたの」

レイチェルが言った。「誰かがあなたになりすましている」

「あるいは、システムが私だと信じている記録が存在する」

ロイはヴォスの矛盾した三つの経歴を思い出した。自分の身分すら一つに定まらない女が、世界の身分を決める制度を動かしている。設計としては巧妙であり、同時に残酷だった。

「誰かがあんたの権限を持っている。正体は分からない」

「そのとおり」

「なら、EDEN を支配しているわけじゃない」

彼女はガラスの向こうの設備を見つめた。「すべてではありません」

07 ― 提案

そのまま会談が終わってもおかしくなかった。また一つ審査を約束し、証拠をいつか忘れられる会議室に積み上げるだけ。だがヴォスは封印された承認申請書を開き、ロイとレイチェルの間に置いた。

そこには継続性配分システムの共同監査が記されていた。水・電力設備の実地検査。身元停止に対する独立審査。被害者の証言保護。そして NEXUSYS-11 に、長期観察への同意を求める条項がある。

「やはり俺を研究したいんだな」

「ええ」

「断ったら？」

「あなたの身体データ抜きで監査を進めます」

「前の研究はそうじゃなかった」

「知っています」

「本当に？」

ヴォスは逃げなかった。「専用媒体の制限を承認したのは私です。解体条項を書いたのは私ではなく、それに署名させるのを止めもしなかった。その区別は裁判では重要でしょう。でも、あなたに結果を受け入れさせる理由にはなりません」

レイチェルが文書を読んだ。「この独立審査には、EDEN が異議申立てを認めない限り、緊急停止を覆す権限がない」

「そのとおり」

「では飾りね」

「決裁経路にはアクセスさせられます。異議申立ての仕組みがなぜ壊れているか、証明できるかもしれません」

「直すこととは違う」

「ええ。でも私自身の鍵で却下されない範囲で、今、承認できる第一歩です」

ロイはようやく椅子に座った。座れば、会談の条件を認めたように見える気がしていた。だが今は、自分の名前が記された文書を、当事者として一字ずつ読みたかった。

「俺の身体を差し出す契約には署名しない」

「求めていません」

「以前は求めた」

「その記録は、どんな判定にも残すべきです」

ロイはクロノスに目を向けた。「どう思う？」

「ここではぼくは実験対象じゃなく証人になってる。でも、ぼくが提案した人に不利な証言をしたらどうなるか書かれてない」

ヴォスは保護条項を追記した。証言は独立機関で保管すること。レイチェルは撤回権を要求した。ヴォスは認めた。

それでもロイは署名しなかった。

「何を見れば信じますか？」とヴォス。

「失われた権限の出所を見せろ。報告書じゃない。出所そのものを」

ヴォスは長く沈黙した。「では取水階より下へ行かなくては。図面にない施設へ」

08 — 値段の付かないもの

下降用の縦坑は淡水化施設より古かった。壁は電波を吸い込むセラミックで覆われている。底の機械式錠は、エイドリアンが管理するオフライン読取装置によく似た意匠だった。差し込み口は、ロイが置いてきた E-00 トークンの形をしている。

ヴォスは空の溝を見た。「持ってこなかったのね」

「そうするよう頼まれた」

「私はそんな伝言を送っていません」

「証人を招いたはずだ」

「あなたたちを招き、C-05 の同意があれば証言を求めました。物理記録を置いてこいとは命じていません」

クロノスは扉に手を近づけ、触れる直前で引っ込めた。「誰かがこれを開けた記録がある。でも、本当に開いたのか、機械が予想を繰り返しているのか分からない」

レイチェルは封印を調べた。破れていない。ただし敷居の白い粉には、最近の足跡が二組ついていた。

「誰か来たわね」

ヴォスは小さな靴跡を見た。「あるいは、子供が来たと思わせたい誰かが」

誰も触れていないのに、錠の表示が点灯した。

《E-00 KEY ABSENT》

《CONTINUITY REVIEW AUTHORIZED BY: ELENA VOSS》

ロイは彼女を見た。「承認したか？」

「いいえ」

次の行が出た。

《WITNESS C-05: PRESENT》

クロノスが一歩退いた。「ぼくは同意していない」

「なら帰る」ロイはすぐに言った。

ヴォスは制御盤へ手を伸ばしかけて止めた。少年とロイを交互に見た。「この向こうに、あなたの寿命が制限された理由があるかもしれません。それでも？」

「あいつの代償にしてまで知りたくない」

短い電子音。

《SUBJECT REFUSAL RECORDED》

そして新しい文が現れた。

《THE FIRST CONTINUITY EXCEPTION WAS NOT A FAILURE TO PRESERVE A BODY. IT WAS A FAILURE TO PRESERVE A REFUSAL.》

――最初の継続性例外とは、身体を保存できなかったことではない。拒否の意思を保存できなかったことだ。

レイチェルはその文を読み、ロイを見た。以前ホワイトルームでも聞いた区別だった。かつて、継続を拒み、終結させられた別の応答個体。現在のロイはその個体の記憶を受け継いでいない。拒否したのは、その個体自身であって、今のロイではない。

「誰かが二つの記録をつないだのね」と彼女。

「同じ機関が両方を作った可能性もある」とヴォス。

ロイは扉に手を伸ばし、下ろした。拒否を記録できる機械が、その拒否を尊重するとは限らない。その事実をクロノスの身体で証明したくなかった。

一行は取水施設の運用階へ戻った。上ではポンプが、名前を消されかけていることさえ知らない市民に水を送り続けている。机にはヴォスの監査提案が残り、ロイの署名はない。何も解決してい

ないようにも見えた。それでも、忘れられた貯水池は供給へ復帰し、認証を停止された市民の一部は暫定的なアクセスを取り戻した。そして一人の子供が、承認しか理解しないよう設計された部屋で「嫌だ」と言った。

ゲートでレイチェルの通信機が鳴った。エイドリアンが E-00 トークンの最古層から、新たな一行を解読したという。証人の認証は不要な部分だった。

それは場所でも名前でもなかった。命令文だった。

《IF THEY ASK WHAT A LIFE COSTS, ASK WHO OWNS THE SCALE.》

——命の値段を尋ねられたら、その秤は誰のものかと問い返せ。

ロイは一度だけ読んだ。それから、もはや自分の計算を完全には統御できないエレナ・ヴォスが待つ施設を振り返った。

次の対面で問われるのは、値段ではない。

誰が、その値段を決める権利を持っていたのか。それだった。

第3章　終